

君ともっと一緒にいら
れたら

世界の破壊者Lostblankシドー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

崇宮真士

五河士道の前世の人間

もし、彼が生きていたら

もし、滯とずつといられたら

もし、二人が結ばれていたら

さあ、俺たちの戦争《デート》を始めよう。

目次

クリスマス	1
唇と重なる瞬間	16
七夕（シヨート）	42
ハロウィン	48

クリスマス

崇宮真士

アイザック・ウイストコットによって殺された青年。

そして、始祖の精霊に名前をプレゼントし彼女と両思いだった青年。

真士が死んで滯は涙を流した。そして、もう一度彼に会いたいと願い

彼の体を自分の霊力で注ぐには強すぎるため少女たちを犠牲にしながら霊結晶くせ

フィラ>を徐々に彼の体に合うよう作っていこうと実行したが

真士が望んでないことを士道の一言で目を覚ました。

そんな彼がもし

生きてたら、もし殺されていなくて滯とずっといられたら

もうひとつの物語が始まった。

12月24日：クリスマスイブ

青年はクリスマスツリーを組み立ていた

「シン何してるの?」

「み、! / / 濡?! / /」

後ろから声かけられて驚く青年

声をかけたのは

出会ってからまだ長くもないが付き合いたての

崇宮 濡

同じ名字なのは真士が出会ったとき名前も言葉もなかった少女だった

現在は、色んなことに調べ尽くして学習していたところであった。

「えっ・ / / えっと、あつツリーを飾っているんだよアハハ / /」

真士は何故か慌てた感じで濡に答えてしまった

それはそのはず

濡はこの世とは思えないほどの美しすぎるのである

そんな少女を手を差し伸ばした真士は

濡に恋をしていた。

濡はテレビと本の情報で学習しただけで実際はクリスマスとはどういう文化なのか

全く理解はしていない。

「ああ、たしかクリスマスイブって言う日なんだっけ。

クリスマスイブ昔、夜の日まで祝う日で行う行事って本で読んだことあるけどそれがどうかしたの？」

「その……クリスマスに飾るツリーを組み立ててたんだ」

「へえーこれがツリーなんだー」

滯は興味津々でツリーの回りを見回せた。

まだツリーとしては完成しておらず今は飾ってる物はほどない。

「いやあ……まだ完成出来てないんだ……」

「えっ、そうなのなら私にも手伝わせてー」

滯は何処かキラキラした目で手伝いたいと真士に聞いてきた。

「あっああお願いします」

それから二人は

「(クスツ……)」

「どうかしたのシン？」

しばらくツリーの飾りをつけていたとき星の形をした物を見て真士は懐かしく思った。

「ああ、いや、ツリーの飾りの中で一番上につける星を見てちよつと懐かしくて」

昔は真那とクリスマスツリーを飾るとき

どっちがツリーの先の星を飾るか言い合いになったなあ
そう思い出し笑いが出た。

「濡この星の形がしたやつ一番上に被せてくれないか」

「うん！任せて！」

濡にツリーの一番上を頼んだときフツと思いつ出した

「あつ、濡この台の上に乗った方が……」

「ん？」

その時、濡は宙に浮かびながらツリーの上に星被せていた

「ちよつ濡!?誰が見てるかわからないかもしれないって!?!」

「あつすつすまない」

窓にはカーテンを閉めておらずいつ誰に見やれるか可笑しくなかったのだ

そして、ツリーの飾りは完成をした

「ふう〜完成したなあ〜」

「お疲れ様シン」

「ああ、お疲れえ〜」

さっきの一件で少しあたふたしたが

完成したあとなんか、いい思い出になった気がした真土
滯との出会い

滯との初めてのクリスマスになる

今年は真那は友達の家泊まるらしい

だから、今年は

二人だけのクリスマスになるのだ

「(やつヤバイ……！ツリー完成するまで楽しかったけど今、完成したあとどんな話す
ればいいんだ……！)」

真土は初めて彼女とのクリスマス

本人はとてもしづいてないかもしれない

何せ、彼女はクリスマスその事は本や情報で知っただけである

そのためクリスマスを楽しむこと

そしてお祝いすることを一緒に過ごす日になっている、

滯にとっても真土にとっても特別な日にしたいと今日のプランを考えたのだからま
くいくのか不安が混み上がっていた

「(落ち着け……落ち着け……大丈夫このプランでいけば滯は……)」

「シン？……どうしたの顔が固まってなんか怖いよ……？」

「へっ? あっあああ!?!? ごっごめん!! /」

「クリスマスってまさかこんなにも怖い日になるものだったのか?」

「違う! 違う! 滞と過ごしたいって思いすぎて緊張しちゃたんだよ!」

「えっ?」

「あっ、」

思わず口に漏らしてしまった言葉で

沈黙になる二人の

時間がたつにつれ

赤面していく二人

そして、二人は

外方向いて一旦落ち着こうとした

「そ、そうだったんだね... / す、すまない... /」

「えっ / あっ、えくとっごめん急に言っちゃって... /」

後ろを向きながら二人は謝ったとき思わず「クスッ /」

笑ってしまった

「アハハハ」

真士は自分が緊張していたことがバカらしく思ったのか逸れとも

今、沈黙になつてゐるのがバカらしく笑つてゐるのかわからなかつたけど、

「好き」

そう思える

どこか甘酸っぱい気持ちでどこか嬉しくなる

またひとつの思い出が増えた気がした真士であつた。

そして、二人のクリスマスはまだ始まつたばかり

「へえ、これがフライドチキン……」

「そう、七面鳥で作つて味を閉め混ぜたのがフライドチキンなんだ。」

「美味しそうですねえ…… そうですねば真那は帰つて来ないんだよね……？」

「ああ、確か友達とクリスマス過ぎたから…… それがどうかしたのか」

「今日は二人きりで贅沢なんだね／＼」

「そつそつだな……／＼贅沢し過ぎたかな？」

「ううん…… スゴくうれしい！」

「そつそつか／＼なんかこつちも喜んでくれてうれしいよ。ありがとう滞／＼」

「えっ？」

「君と出会えて、そして君と今日も過ぎさせてうれしいよこれも、神様がくれたプレゼント」

トって思うとなんか君とこの日々に感謝しちゃって……なんか、可笑しかったかな？……」

「ううん、うれしい。うれしいよシンあなたがくれた名前。あなたがくれたこの時間。あなたがくれたこのプレゼント私はずっと大事にしたいとこの時もこの先もあなたとずっと過ごしたいもし叶えられるやら私はそれでいい……ありがとうシン『大好き』」

彼女の満面な笑みが真士の心をキュツト締め付けて血流が激しくなる感じ

ああ、好きなんだよこの笑顔

好きで好きで仕方がない

このプレゼントはサンタクロースと神様とオレを産んでくれた両親、そして、今いない実の妹真那が応援してくれたお陰だよ

「俺も好きだ濡のことが『大好きだ』!!／＼」

そう叫んでしまうほど彼女のことを濡のことが大好きだ

誰が濡を狙おうとオレが助けるオレが守るオレと一緒に逃げ続けてやる

それが10年だろうと20年だろうと彼女の手を握り続けてやる。

そう、思うようになるほど

大好き

二人は真つ赤に染まるほどの顔だった

それは室内の温度のせいかそれとも、
大好きって言葉で顔が赤面しているのか二人しか知らない。

「ふう〜」

そして、二人は豪華な食事を満喫したあと少し腹休めをした。

真土はお腹の膨らみがそんなに出ないがなんだかサンタ見ないな腹になったんじゃないか

少し苦笑をしてしまう気持ちになった

滯は豪華な食事を満喫したのにも関わらず全くお腹の膨らみが見えなかった

スゴいのかそれともそう言う体質なのかなぜか考えてしまった

「ねえ、シンこれは：：どうやって遊べばいいの？」

「ん？それは：：」

滯が取り出したのはツイスターシートであった

「それは、ツイスターゲームって言ってスピナーって言ってルーレットにさされたお題になった色を体の手足で踏むゲームだよ」

一体、何時からあったのか最初は思ったが

滯が気になってたようでゲームの遊び方を教えた。

そして、少しお腹が楽になってきたとき

口に出した

「……ツイスターゲームでもやってみないか？」

濡の表情がパアアってなったとき

ドキツつとしたかわいいな本当

そう思うほど濡が好きだとわかった。

<右足に青>

「ハイー」

<右手に緑>

「ハイー」

二人はスピナーにさされた色を体の足で踏んだり
手でタツチしたりした。

徐々に

体の位置が届かないところまで行くと

体の限界が出てきた真土が先に倒れる寸前だった

真土は

赤：右足

青：右手

緑：左手

黄色：左足

の状態になつてた

澪は

赤：左手

青：右足

緑：右手

黄色：左足

の状態でも余裕の顔をしていた

「も．．．限界かも．．．うわっ！」

「きゃっ！」

「ててててて．．．ごめん．．．!？」

真士が力を抜いたことで

澪の胸にうずくまる形になった

「だっ／＼大丈夫? : : / シン? / /」

「ほ、本当に! / / ごめん! / /」

とつきに起き上がるり土下座の形に入る真士

「わ: : 私は / / 大丈夫だよ / / シンは大丈夫 / / 怪我とかしてない?」

心配する滯は真士の顔に近づき怪我してないか確かめた

「俺は / / 大丈夫だよ / / でもさつき力抜いてみつ: : 滯は怪我とか大丈夫か?」

「う、うん / / 大丈夫だよ / /」

／／／

／／／

二人は顔が赤く染まるり今でも唇と唇が重なる距離にいた。

今、家にいるのは真士と滯二人だけ

真那が遅くから帰る事なく友達の家泊まる

今、二人だけの空間の中に誰も入ることはない願つてる真士

フツと滯が窓の方向に振り向いた

「ウワー: : !」

「! どうした滯」

「シン! 見てえ綺麗: : :」

「雪だ：：」

窓の外で雪が振りだした

それを見てキラキラした瞳で雪を眺めていた漣がなんとも言えないほど愛しいしく美しいほどの表情を見た真士は

さつき顔がこんなにも近かったことを思いだし

一人赤く染まっていた。

「ねえ、シン」

「な、なんだい：：漣」

「ケーキでも食べよっか」

「あ、ああ、そうだな：：」

真士と漣はケーキを食べ始めた

真那の分と家族の分としてケーキを残して

二人だけでケーキを食べ始めた。

「シンはいあゝん」

「えっみ漣!？」

「ん？真那から教えてもらったけど、もしかして間違えてた？……」

「い、いやその……初めてだったから驚いちゃって……」

「そうなんだ／＼じゃあ、シンあ、あゝゝん／＼」

「！あ、あゝゝん／＼」

「美味しいね」

「ああ、美味しい」

真士のクリスマスは

初めての彼女とのクリスマス

澪は初めてのクリスマスは

真士と過ごしたクリスマス

回りからすればつまらなくそして、下らないクリスマスって思われるかもしれないけど、

二人にとっては初めてでそして、特別なクリスマスだった時間であった。

「来年も、／＼／＼その次も一緒にいたいシン

あなたとずっとそばに……」

「俺もだよ／＼／＼君にもつと教えたい……もつと見せたいこれからもそのさきも……」

／＼／

その日二人は約束をしたこれからもそのさきもずっと一緒にいられることを

唇と重なる瞬間

今、目の前の状況を整理しよう。

五河士道そして、彼が救ってきた少女たち

世界を殺す災害と言われる元精霊たちは今、少女として生きていた

だが、精霊はすでに彼女、夜な色の神秘的な髪

生まれるにもこんな美しい存在になんかも分からない

そして、双眸のような瞳を持つ少女

…夜刀神十香…ただ、一人を除いて

だが、間違いなく

士道たちの目の前にいるのは

精霊の全ての始祖と言われる

そして、愛する人と共にこの世に去った少女

「……… 滯………」

「久しぶり、…士道………」

崇宮滯が目の前に存在していた

今士道の目の前にいるのは

…五河士道…の前世として

そして、崇宮滯の愛した人

…崇宮真士…だったのだ

神のイタズラなのか

だが、目の前にいるのは確かに真士

士道はそんな気がして

まるでドツベルゲンガーでもあつた感覚だと頭で考え出した

「お前、本当に真士なのか？」

「おおそうだけど、」

信じがたい状況で驚きを隠せない士道は真士に問いかけて

真士はそれを受け答えた

「なあ、これどういう状況なんだよ……」

「そうだな、期間限定って言う奴？」

「意味、わかんねえ！」

「まあ、そうなるよな」

まるで双子の兄弟で漫才をするザ・〇つちでも

お〇ぎとピー〇でもない

少し、肩の力が落とされた感覚だった土道は

改めて、琴里たちに紹介をすることに動こうとしたが

「きやああだーりんが二人いますううう!!」

「これが、土道のもう一人いや、土道の前世崇宮真士何処までが土道と似てるか拝見させてもらおう」

「ククク、我ら八舞姉妹と同じ双子、いや、生き別れの双子<ジエメル・クランツェ>だったとは」

「動揺、耶俱矢は今どっちが土道なのか混乱していて下手な厨二で誤魔化してます。」

「ご、誤魔化してないし!ちゃん分かるし!」

「質問、ではどっちが土道なのか真士なのか耶俱矢は指を指してください」

夕弦が耶俱矢に今、目の前にいる二人がどちらが土道でどちらが真士なのか耶俱矢に答えをさせた

「そつ、そんなの分かるし!えつ、え….:. つと….:. 右にるのが土道で左にるのが真士?」

「いや、オレ、土道だけど」

「オレは真士だけど」

まるで信じがたい話だった魔術師ウィザードは今でも健全してる

だが、精霊の力なのかそれとも

天香の力なのか

今だ不明の形

「そういえば、十香は？」

突然の出来事だったため琴里が今、現状に十香だけが精霊であるため見回して見たがいなかったことに気づく

「もしかして……十香が……」

「あついや、十香はオレと約束でデートにでも……ってヤバイ!!」

土道は十香と約束していたデートをすっぽかしてしまったことで突然慌てた様子で身支度をテキパキと動かしていた

「十香っ!」

「シドー!」

慌てて駆け込んで現れた土道は

彼女の前にたつて膝を手にかけて息切れになって状態になった

デートをすっぱかしてしまったことに怒ってないか心配で顔を見れなかった

「ゴメン！約束していたのにすっぱかして！」

士道は頭を下げたまま十香に謝罪をした

こんなことしか今は出来なかった

だが、徐々に顔を上げてみると

心配した顔で見ていた「

「大丈夫かシドー……」

怒ってるかと思っていたがすごく心配して悲しそうな顔で問いかけて十香は心のそ
こで士道は悔やんだ

目の前で消えてしまったあの日

自分をもっと彼女と一緒にいたかった

彼女との時間をもっと有効に使えばよかった

彼女に何でもして上げたかった

あの時のことが忘れられず

十香と少しでも

長く

共に過ごしている

愛しい存在を目の前にして心の安らぎと今日の遅れてしまい不安にさせた悔しさが混じりあつた形が心を蝕んでいた

「あつああ……ごめんな十香せつかく約束していたのに遅れて」

そんな謝罪でも十香は首を横に振り来てくれたことを嬉しく思った

「うううん、いいのだシドーが今、来てくれてホツとしたのだ」

「十香……」

あの日、彼女が帰ってきた時

そして、今、目の前で見せる笑顔で心の悔しさがどこか消えていく形が出た

だけど士道は首を横に振り

遅れたお詫びをしないといけないことに決意のような思いが出来た

「十香、遅れたお詫びを何かさせてくれないか？」

「別に何かを詫びろとは……！」

「オレが気が済まないんだ、頼む十香……」

「シドー……わかつたあとで考えとくぞ！所でシドー……」

十香は士道の想いをこたえるが今、目の前にいる士道の後ろに瓜二つの顔が立っていたことに気がつく

「なんだ十香……」

「後ろにいるのは、シドーなのか？」

「後ろに…… って真士!? どうしてってか濡まで」

「いや、なんかお熱い仲だなあって思ってた…… // //」

「はあっ!!」

「濡? 何故お前もいるのだ?」

「それは、私たちにも分からないの」

「分からない? 何故だ?」

「それは……」

「オレたちもデートにでも行けって琴里から言われたんだよ」

士道に似た男真士は間に入ったのかそれとも空気が重いと見えたのか分からないが切り替えの言葉らしきことを口に出した

「そうか、なら二人も一緒にデートでも使用ではないか!」

「えっ?」

「えっ?」

「えっ?」

三人は口をへのじになる形で驚いた

十香が濡と真士のデートを士道と共に一緒にデートを使用と誘った

それはまさしく

「だっ…… W^{ダブル}デート……！」

「うむー」

同じ声をしてるため十香は分からないと思うが土道と真士は動揺をしていた形で言葉がハモった

それから、真士と滯×土道と十香

二人のペアで同じ列で歩いていた

街の人は

真士と土道の顔が双子程度に見えたのか

少し驚きが出ていた

「へえ…… 今の次代ではスマアトフォンって物が使われてるのかあ」

「そうよシンあなたが眠ってる間、次代は変わっていたの」

「真士はその時なかったのか？」

「なかったも何もオレの時は電話が自宅ようで大きな携帯があったんだぜそれにお前が言うにはその小型で音楽も地図もあるって本当、その次代は羨ましいな！チキシヨー

！」

一人はまるでコールドスリープでもしたかのような発言をして悔しそうな言葉をしているが

士道は何故だ重たくなる話にしかなかった

「なぬ！シドーではないシドーには携帯電話ではなかったのか！」

それを首を突っ込むのかそれとも素直なのかどうか十香は驚きを隠せなかった

ちなみに「シドーではないシドー」とはまだ真士と士道を区別が出来ていなかった様子だ

「ああ、スマアトフォンにカメラが着くのもオレは驚いたよ」

「おお、私もシドーに色々教えてくれてるがシドーではないシドーは知らないこともあるのだなあ」

「うーん具体的に言うとおレはs…」

「ねえシン、士道、十香あそこのカフェで食べない？」

「…！あつそつそうだなオレもあそこが良いななつ十香？」

「ん？うむ…」

途中、真士の最後の言葉を被せる形で滯はカフェの看板を指して

それを察したのか士道も滯の話を合わせた

「いらつしやいませ、」

「4人で」

「かしこまりました、こちらの席へどうぞ」

女性定員に人数を紹介をしてその席に

士道と十香そして、

漣と真士と男女それぞれに席を座らせた

「どのメニューに使用か十香」

「そうだなあこれなんてどうだシドロー！」

「ははっ相変わらず十香は沢山食べるなあ」

士道がメニュー表を渡したあとキラキラした目で選んだのは沢山入った奴そう思ったのか十香の指してる方を見た

「イチヤイチャラブラブラブセット「あなたとの時間もラブラブラブに過ごせますよ
うに♥?」」

と描かれたメニューを指してあった

ボリュームはまるで地方限定メニューにして

早食いでもしそうなメニュー

というより見た目は甘々でどうだろうか

士道は沈黙に染まっただが

「…… うん、すみませ〜ん！」

「はーい」

「この「イチヤイチャラブ」を…… ラップセット」を…… お願いします…… / /

どこか口に出すのも恥ずかしいメニューを口に出したが

今日、遅れたこともあつてか彼女の要望に断らなかつた

普段とは違う土道を不思議そうとは誰も思わないだろう

「お待たせしました！」「イチヤイチャラブラップセット」ですごくゆつくりとどうぞ」

笑顔でテーブルの前に置かれたポリウムを見た男性二人は朝何も食べなかつたからかもしれませんが

ポリウムが耐えられるのか不安が生まれる真士

ごくぐりつと唾液を飲み込んで

覚悟でも出来たのかスプーンを握りしめた

滯と十香はキラキラした目で見つめた

女の子は可愛いのも好きだが甘いのも好きなんだろうな

そんなことを思った

「お客様、カップルであればお写真でもどうですか？」

「あつ、お願いします」

士道は定員の方に方から声をかけられたので
写真を撮ってもらった

士道と十香のデートは食べることがデートと真士は二人の方を見て考え出した
「シン?」

「あつああ何でもないよ滞」

滞は真士の表情を見て険しい顔を作った

「ふう〜食べきったあ〜」

「うむー甘くて美味しかったぞー」

満足感を感じてお腹を撫でる真士と士道

滞と十香はまるでお腹を膨らまなかったが満足感を出していた

それから士道は

まだ、時間は有り余っていたのでゲームセンターに行かないかと告げた
それを喜ぶ十香

真士も今の次代のゲームセンターに興味も持った

沢山のゲームが置かれていた中で

真士は目にしたのは

「クレインゲーム……なあこれでやらないか士道？」

「ん？構わないけど」

「ルールはお互い男女でペアになって景品を落とすってどうかな」

「おお！良いではないか！」

「ええ、楽しそうね」

二人のにこやかな顔を見て少しドキッとした真土を見た士道は
(なんか、すごく分かる)

そんなことを思った

ペアは士道×十香

真土×滯

とさつきと同じペアになってクレインゲームゲームを始めた

「シドー！シドー！アレが良いぞ！」

十香が示したのはお菓子が沢山中に置かれたコース

「おっ、じゃあこれに使用か」

「うむ！」

士道は断ることなく十香の指名した物で挑戦をした

「シンこれなんてどうかなの？」

「ん？おっこれは良いな」

真士は滯が指名したゲームに挑戦をした

「オレたちの共闘を見せようぜ！滯」

「うん！」

真士と滯は互いの肩が当たり真士の心臓の鼓動が早くなり今、一緒にゲームを協力プレイしていることを気がついた

彼女の髪の毛の匂いがそばに感じて

なんだか、いい匂いで集中力が続くか分からなかった

それと、同じ状況の士道

真士が考えたルールでやってるが今、気がついた

十香との肩がくつつき

士道の心臓の鼓動が早くなる

そばに居ることそれが何よりも

愛しさが伝わる

目の前にいる人がこんなにもそばにいることの嬉しさ

それぞれは

クレインゲームに集中出来てるのか分からなかった

だけど、

心から

幸せな時間を感じた

「結果発表!!」

どかのバラエティーのパフパフとならす何かがあったらそんなイメージだろうか

真士のテンションの高さだった

士道×十香ペアは

お菓子の詰め合わせ、ぬいぐるみ

を計4つだった

真士×滯ペアは

小さなぬいぐるみ

を計4つ

「グレーゾーン！」

結果は引き分けだった

だけど士道と十香は真士と滯に

自分たちが落とした景品を二人にプレゼントした

「んっ？」

「これって？」

二人は思わず首をかしげた

だけどプレゼントした二人はなんのためらいもなくプレゼントしたのどこか満足

げな顔を見て笑顔だった

そして、4人はゲームセンターに出たあと

士道に引つ張られていた

「いったい、何処に連れていくつもりだよ？」

「それは、見てのお楽しみ」

真士を目隠しして

十香が真士を運んでいた

いや、普通

女の子にこんなの運ばせるかって驚く真士を少し笑っていた滯と士道

そして、たどり着いた場所

「目を開けてもいいぞ」

士道は呟いて

少し、霞むが徐々に光になれてか

見上げた景色は

夕日に染まる街並みをバックに

街の高さを眺められる絶景を光景した真士

真士の驚きを見て少し笑顔になる

士道と十香

そこは

士道は十香との思いでもありお気に入りの場所でもあった場所を

向かったことを気づいた真士

「本当は、海にでも連れておこうかと思ったんだけど」

ゲームセンター内で

士道と十香は

2人きりになって

改めて真士のことを考えていた十香は

「なあシドー」

「ん？どうかしたか」

「シドーではないシドーのことなんだが」

「真士のことかどうかしたのか？」

「私はその… 真士にも見せたいものがあるのだが… シドーあの時シドーが遅れたらそのとき、シドーは「私に何かお詫びでもさせてくれないか」と聞いたな」

「ああ、それがどうかしたのか」

士道はなんとなくわかっただけど

その言葉を口にするのは彼女だと悟った

「シドー、真士と滯に私たちが見ていた景色を見せないか？」

そのときはどう思えばいいのか

心のそこで

「（ああ、オレが愛しく思えた人は誰にでも優しい自分があの時、見せた景色を前世のオレを

… 崇宮真士… と… 崇宮滯… に見せたいと）」

口に出したとき

断らなかつたいや、断るわけにはいかなかった

士道はそう思った

「そうか、十香がそうしたいならオレはそうするよ」

「すまない、シドー」

「何で謝るんだ？」

「シドーは私のことをその……お詫びをしたかったんだろ？」

「だけど、それが十香の望みであればオレはそれでも構わないよ」

「シドー……ありがとうだ」

「そうだ、十香この景品も2人あげないか？」

「おお！それは良い考えだなシドー」

そして、

今に当たる

真士はなんとなく

あの2人は

濡と一緒に見せたかったことに気がつく

いや、知っていたのかも知れない

何者かが呼んだのは分からない

けれども

2人は真士と滯の為に

この景品もプレゼントとしたのがなんとなく伝わった

「そうだ、さつきあの場所にアイスクリーム屋があったぞ！行くぞシドー！」

「ああ、十香」

そう言つて彼らは席に外した

そして、滯と2人きりになつたことで

少し緊張感は出た

だけど滯は

真士の手を近づけて

真士の手を重ねた

本来なら真士がエスコートをするはずだった

真士はどうしてそう思つたものの

何故か口に出さなかつた

2人がアイスクリームを買うのに時間はかかつてるのは不思議だった

もしかしたら、アイスクリームが溶けるからかそれとも

「ねえ、シン」

「なっ何滯?」

「ここ、綺麗だね」

「ああ、そうだな」

2人は沈黙になっていたが滯から口にだしてやっとなりが出た

「ねえ、シン」

「んっ?滯」

「その…:./././」

その空間はとても静かで

そして、とても甘い時間が2人を作り出した

滯の髪から靡く甘い香り

滯の瞳が真士の目に写る

そして、

お互いの顔は徐々に

わずかすうみりに足して

そして、

唇は重なった

夕日に染まる景色は

まるで彼と彼女の一つの思い出が生まれたのかもしれない
もし、お互いの生きていたら

この思い出を語れるかもしれない

彼らは消えるであろう

そうお互いは思っていたが

「濡おー真士いーアイスクリーム持ってきたぞ!.....!?!?!?!」

思わず土道は彼らが

キスをしていた所の場面を出くわした

だけど、もし

あの2人はこの日だけ現れたとしたら

..消える..

そう思っていたが

彼らは消えることはなかった

やはり不思議だった

真士も濡も

2人とも

..もうこの世には存在しない2人であった..
だけど消えることはなかった

それはいつたい

「!?／／／しっ土道!?いつからそこに」

「あつ、」

2人の緊張感が一気に溢れて

そっぽ向いた

どうしてだろうか

この2人を見ていると

まるで自分と十香に似ていたことを

少し思っていた

「ああアイスクリーム持ってきたぞ..:／／／／」

「あつああありがとう土道..:／／／／」

「シドー!!シドーのぶんも持ってきたぞ」

「十香、ありがとう」

「それじゃ、」

『いただきます!』

今日はとても甘い物しか食べていなかった

4人であった

七夕（ショート）

七夕

織姫と彦星が天ノ川で年に一回二人が会える日

地上の者たちはそれを少しづつ忘れていった時代が出てきた

「そう言えば、あの日七夕楽しめていたかな」

「どうしたのシン？」

「あつ、いや／＼」

真士は突然、漣が顔を出してきたから少し驚いた

士道は二人のやり取りを見ていてなんとなく思った

「……（七夕か…… 真士は俺の前世だった存在、漣が愛した人、漣にとってはまさに彦星様つてところかな、そうすると、漣は織姫様かあ……）」

そう、思うと二人がちょうど七夕の登場人物に似合うと思ひ微笑ましく思えた

「主様どうかしたのか？」

「ん？ああ、何て言うかあの二人を見てると」

「織姫と彦星に思えてしまったってことかしら」

「ああ、琴里もそう思うのか」

「私だけじゃないかもよ」

「えっ」

士道が振り替えると

ニヤケていた

同じ顔をした少女たちがいた

いたずら顔の八舞耶俱矢と

眠そうな顔の八舞夕弦

澪が風待八舞に靈結晶セフィラを捧げた時

風待八舞の産まれる前

もう一人の妹の可能性がいたかもしれないもう一人の存在のお陰で

二人は分かれた存在として生まれた

士道からすれば自分の前世真士と少し似たような者と

思っていた

「いや……べ、別にうらやましいって思っていないし！ただ、こんな恋も見届けるのも悪くないと思っただけだし」

「善望、耶俱矢は土道とイチャイチャしたかったのに十香とくつついて寂しいだけです」

「そつ、そんなわけのし!!」

「まあまあ、落ち着けてって耶俱矢ん」

二亜は二人の間に入った

「そうだ七夕だからみんなも短冊で何か願回事書こうか」

「それは、いいわねみんな、何か願回事ある?」

真土の提案で滯は回りの元精霊たちに聞いた瞬間

元精霊だったメンバーの折紙、二亜、狂三、美九の四人が飛び付いた

「えっ!?!なにこの闘争心!?!」

「あつ、真土はまだ知らなかったようだ」

「えつちよつ待つてどう言うこと!?!」

「うん、きつと知ることになるよ」

「えっ!?!」

「でももし進歩してくれるなら少しはいいけど」

だが、土道の思いは届くことはなかった

「恐ろしい子たちだった……」

「うん、これを楽しめると案外楽しいから」

「いやいやいや滯と一緒にいる方がずっと楽しさあったよ!？」

「うん、真土はそう言うと思った」

「土道はやっぱスゴいよ……」

「うん、昔だったら驚くことも少し身体中の毛が逆立つこともあったけど、共に生きてから、共に支えてくれた仲間だから……でも、結局は十香と出会わなかったらどんな未来だったのか考えられなくてね……もし、滯によって俺の人生で全て出来事……十香と出会って色んなことを知って色んな人と出会った時の……思い出が全てなかったことになったらそれは一体どうなるのかわからない」

「土道……」

「でも、滯がお前を望んでいた、滯はお前に会いたいと思ったそれは何の罪も背負わないなんてもんじゃないと俺は思った。」

「……」

「きつと真土が滯と真逆の存在になってもし滯が人間で真土が始祖の精霊だったとしても同じ道の可能性もある……今はそう思えるんだ」

「…… なんか、俺と滯のせいでお前にも迷惑つて思ったけどなんか違うことはわかる」

「ああ、真土と滯の出会いでどんな未来になっていたのかわからないまるで七夕だよな」
「七夕……？」

「ああ、真土が彦星、滯が織姫お互い愛を育んでいたけどウエストコットのせいで共に引き下がれたここまではなんとなく似てるよな」

「ああ…… なんかそう言われると似てるな」

「そして、二人は再開するのにかかなりの苦労をした滯」

「…… 俺はあの時後悔もあつたのかもしれない」

「後悔……？」

「もし、滯と出会わなかったら…… 俺は生きていたのかとかそんな考えで出るときはなかった一番後悔したのは…… 滯を幸せに出来なかったことだな」

「…… そうだな、お前にとつても滯にとつても一番悔やむものだから、こうしてここにいると思う」

「土道……」

「きつと、それが天香の…… 神様のお望みなかなまあ、俺はわからないけどきつと俺はそう思い続けたいんだよ」

「……そうか」

「シン！」

「漣、どうかしたのか？」

「シンもなにか願いたい事書いたらって思ってたけどどう？」

「漣……おう！今年は何を願おうかなあ〜」

「私も一緒に短冊で願いたい事書こう！」

ハロウィン

とある日10月31日街は小さな子供が仮装し近所の家の人に「お菓子を暮れないといたずらするぞ」つと口にしお菓子を貰える日が現れるさなか

誰かの一声で皆にも仮装がやることになった

「なあシドー？ハロウィンの日だが、今年はお菓子は無いのか？」

「そうだなあ一様お菓子は準備してあるけど」

「おお〜！」

夜色の髪をした少女「夜刀神十香」の一言で五河家のハロウィンは始まった。

前々回までは準備もそんなに出来なかつた「七罪」や「折紙」の件で休んでもまたトラブルが起きたことでやる機会が合わなかつた。

今年はお菓子はラタトスクたちの力で大量生産して貰い

取り替えず箱三ケースは家に準備している。

「ハロウィンかあ〜」

「シン、ハロウィンってどんな仮装をすればいいの？」

「えっ・・・とそうだなあ・・・」

ちやうど向こうのソファでどんな服が似合うのか聞いてきた少女がいた

彼女は十香を生み出しそして全ての始祖の精霊と呼ばれた少女

崇宮濤

そして彼女に世界を教え彼女をこよなく愛している青年

士道と瓜二つの顔をした青年

崇宮真士

二人のやり取りは両思いだが二人の関係は短かつたためあたふたする真士が見れる。

「あつ、コレなんてどう?」

「えつ、コレは…ちよつと／＼」

「嫌?」

「嫌つて言うかコレは／＼」

濤の手に持つてる物を見て赤く染める真士

それもそのはず彼女が手にしているのは肌が見えるはだけた格好になる衣装の一つ

『魔女』の衣装をアレンジされたはだけた衣装

「じゃあコレは?」

次に出したのはナースを出した

「ナースかあ…うん。それなら…」

「それをダメージタイツを合わせて着こなさせば少年二号もイチコロだよ」

「えっ!?!／／ちよ：．．． 何急に割りこんでんだよ二亜!?!／／」

「あれあれ／少年二号もしかしてミオリンのコスプレを想像して赤くなっただよ／年頃っていいねえ／」

「そつそんなことを!?!／／」

「ことを?」

「考えていない：．．． って訳じゃ：．．．：／／」

二亜のいじりで見ると真士は赤く染めるため二亜の顔が悪巧みする顔が少しづつ漏れ始めた。

それを見ていた少女は二亜の後ろからチョップをした

「あなたはサボってないで手を働いたらどうですか?」

「グヘッ」

「あつ：．．」

「ああん!もおくいいじゃんロボ子のけちい／!!」

「大変失礼しましたね真士今のは忘れても構いません」

「えっ、あつうん」

「どうしたんだ真士?」

「いや、何でもないよ土道」

「さつき鞠亜が二亜を連れていったけどなんかあったか？」

「うん、ほんとでもないよ。ほんと」

「そうか、俺ちよつと買物とかしていくよ」

「えつ、じゃあ俺も」 「いや、いいよ滯と楽しめばいいからさ」

「ねえコレとかどうかなシン？」

「えつ…」

滯はいつの間にかコスプレをしていたその隣で美九が何故か楽しそうな顔をしていた。 いや変態な顔で彼女の服をコーディネートしていた

「うつ… うんスゴくかわいい… /」

「キヤアア可愛いですね滯さん!!」

滯がコスプレしていたのはフランケンシュタインのような縫い目とかわいらしいフリルで来た格好だった

「そつ、そうかなあ…」

「はい！あつコレなんてどうです？」

「コレは？」

「コレはですね〜ポリスガールの正装ですよ〜」

美九は手に持っていたポリスの正装を濡の身体に近づけてサイズを図った

「ささっ着てみましようよ！ね！濡さ〜ん」

「うっうん…」

「あれ？、濡たちはどこに着替えて行こうとしているんだ？」

疑問を持った真士は濡たちが着替える場所はどこでやるのか気になった事を呟いた

「もー真士さんはスケベですな〜」

「スツスケベ!?!」

「好きな人の前で着替えをするとおろそかをみたいなんで大胆ですよ」

「いやいや!?!だつていつの間にか濡が着替えてきたから気になつたつて言うか…」

／

「ああ、さつき美九たちが一度精霊マンションに向かつて着替えて行く話をしていただけ聞いてなかったか？」

「えっ!?!いつの間になんな話をしていたの土道!?!」

「えっ?二亜が真士をからかっていたところからだけど…」

「……………」

ポカンとした顔をした真士をみた土道はどう言えばいいのかなわからないがとりあえず土道は段ボールを持ってきた段ボールの外に男性用と書かれた物を土道は出した

「コレは…？」

段ボールを見て土道に聞いてみた。

「えつと、コレはラタトスクたちが用意した仮装グッズだよ」

「フエ〜」

「内容みるか？」

「ああ……」

土道は段ボールを開けてみて土道はなんとなく変な顔になった。

それを見た真士は土道がそんな顔する理由を覗いた。

「コレって…」

「ええつと… カツラだろ？、ウィッグだろ？、セーラーだろ？つてもうコレ女装じゃないか!？」

「いきなりよくわからん物が出てきたよコレ!？」

「他には、おっ！なんとなくましな物ありそう」

「ホントか!？」

「吸血鬼セット」

「おお〜」

「ミイラ」

「ミイラ」

「ふむふむ」

「フランケンシュタイン」

「なるほど」

「皿屋敷」

「えっ、？」

「河童」

「んっ、？」

「鬼」

「いやいやなんか急に日本の奴になってない？」

「キョンシー」

「キョンシー!？」

「カウボーイ」

「カウボーイ!？」

「あつ、この段ボールだと最後になる」

「最後はなんだよ」

「蜘蛛男」

「蜘蛛男!？」

「他の段ボールもあるがどうだ？」

「とつとりあえず……頼む」

士道は段ボールの中身を取り出しさまざまな衣装が沢山出た
真士と士道は何を着るかお互いを選んで

そして、

「クフフフフ……」

「哄笑。ワハハハハ……」

「ジャーン!? どうかこの漆黒の黒の衣装を！」

「共変。耶俱矢とお揃いで着てみましたどうですか？」

「悪くないんじゃないかしら」

「そうですねよくお二人とも似合ってます」

「二人は何を着たの？」

「フフフコレを見てわからぬか？」

「猫耳？」

「フフフわからぬようだななら答えてやらんとしょうか」

「自答。耶俱矢は聞こえてないふりしているので穏便を」

「は……」

「私たちはブラックキャッツ！だニヤー」

「同声。ニヤー」

「あらあくかわいい二匹の猫ですわねえ〜私が可愛がつてあげますよ〜」

「ワアアア!!美九そんなに近づきすぎだああああ!」

「解離。耶俱矢あとはお願いします」

「ちよつ!?!夕弦!?!何離れているのねえ!!?!夕弦つてば!?!」

「徐冷。なんまいだむなんまいだむ」

「夕弦うう!?!夕弦うう!?!」

「ダメですよ〜夕弦さん…… 耶俱矢さんとセットなんですから離れちやダメですよ」

「困惑。えっ、私も」

「フフフフさあ…… 耶俱矢さん夕弦さん行きましようフフフフ」

『いやあああああ』

「それで、琴里はどんな格好なの」

「私はコレよ」

琴里はカボチャのジャックオランタンのイメージした衣装だった

それぞれカボチャ・おぼけ・魔女・キョンシー・ミイラ・ゾンビ・骸骨・海賊・悪魔・狼男?と個性が溢れる衣装で五河家は賑わった。

「みんな、集まってる様子だな」

「おおシドー来たのか!」

「土道は… 蜘蛛男?」

「ジャンケンでこうなった」

「ハハハハ少年そのマスク息苦しくないの」

「そりゃ、赤と青のツートンカラーで壁でも上りそうな姿しているけどさすがに呼吸出きるマスクでしょ」

「シンは?」

「お待たせ」

真士はゆっくりと歩いてやってきた

「おおく少年二号はナイトかあ」

「なあ、この鎧… なんか重くないか…?」

「さまよった鎧だからねえ」

「さまよったってなんだよ!?!」

「でもカッコいいわシン…」

「えっ、そうかな…」

「うんっ！」

「濡もとても似合ってるよ…」

濡のハロウィンの格好は魔女だった

「シン…」

「ゴホンッ」

「…っ！」

「ええ、それじゃあ、始めましょうかハロウィンパーティーを」